

ノコ（ノコギリヤネ）が“たつ”風景
（断章“ノコギリヤネのある風景”その3）



▲ 三岸節子自画像（1925年、20歳）

鋸屋根工場の日本第1号は、明治16（1883）年の大阪紡績三軒家工場とされる。尾張西部地域では、濃尾地震（1891）年後、1900年頃に、最初の鋸屋根工場が建設されたといわれている。

現在の一宮市小信中島に生まれた画家・三岸節子の随筆集『花より花らしく』（1977）には、「おもいで町」と題して、故郷の起町、のこぎり工場などについて記されたところがある。

節子の生まれは明治38（1905）年。生家は、富裕な地主で、織物業も営んでおり、当時珍しい煉瓦造の鋸屋根工場の写真が残っている。

奇しくも、三岸節子94年の生涯が、ノコギリヤネの盛衰と重なってくる。画家としての出発点となった《自画像》が、初期の「ノコギリヤネのある風景」と呼応する。

ノコギリアン（神奈川県藤沢市在住／一宮市今伊勢町出身／時々、のこぎり二に出没）

1. “ノコギリヤネのまち”の100年

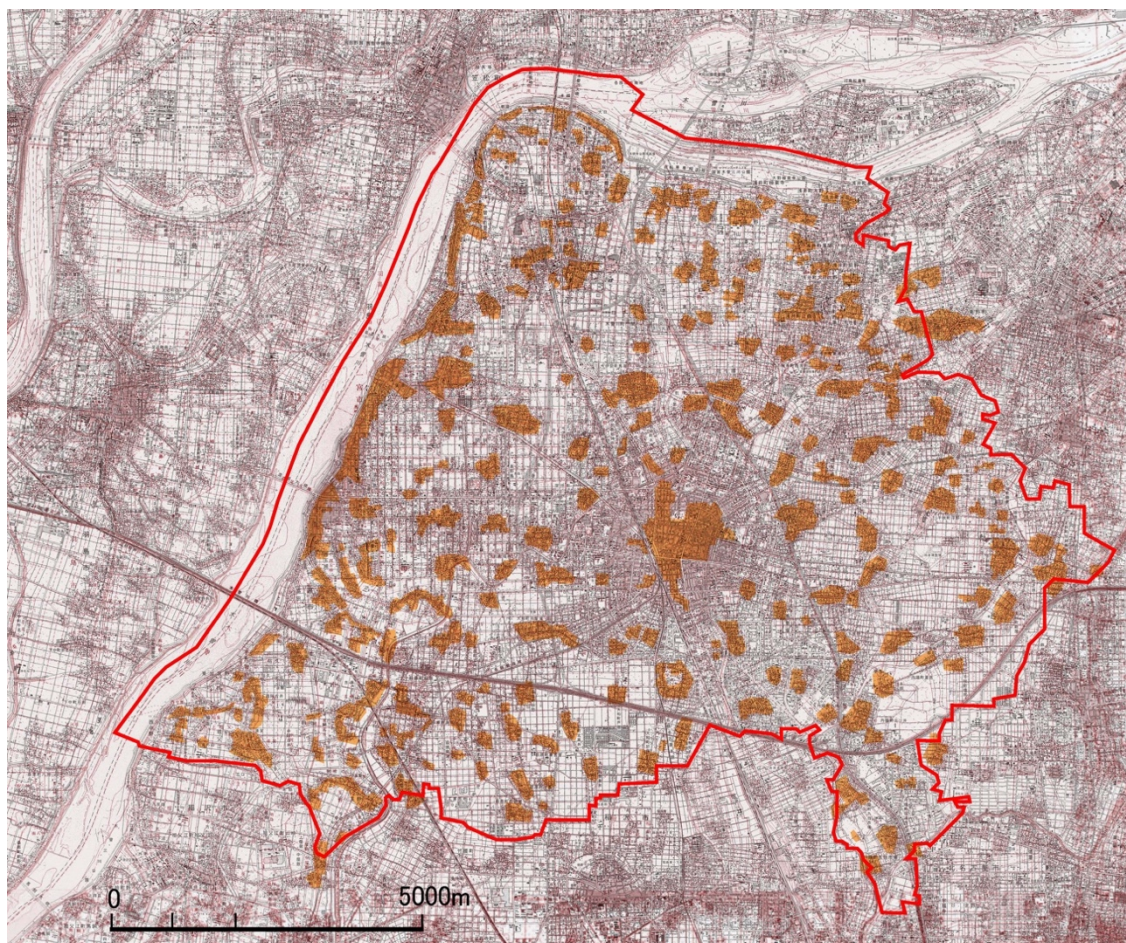
「いずれの村も田圃や畑の中に安直なのこぎり工場を建てて、騒音をまき散らし、もはや私の幼い頃の眠れるようにのどかな古里は何処にもない」（『花より花らしく』）

尾張西部地域で、鋸屋根工場の建設が本格化するのは大正5(1916)年頃とみられ、太平洋戦争を挟み、高度経済成長期の昭和30年代を中心に再び増殖したといわれる^{※1}。第一次大戦と朝鮮戦争という二つの戦争特需がその背景にある。一宮市域(旧尾西市、旧木曽川町を含む)の繊維工場は、昭和47(1972)年にピークの約8,300を数える。その殆どが、鋸屋根工場と考えられる。

節子の生まれた1905年当時、集落の形や分布は、江戸時代から大きく変わっていないだろう(下図では、橙色が1920年頃の集落地)。鋸屋根工場が出現し始めた頃である。そして、戦後、市街地が拡大し(下図では、紫色の市街地図/1970年頃)、鋸屋根工場の最盛期を迎える。

ほぼ100年前に出現し、50年前にピークを迎えた鋸屋根工場。二つの時代の「ノコギリヤネのある風景」には、大きな違いが見られる。そして、いま、のこぎりニヤスパークなど、鋸屋根工場の再利用による、新たな「ノコギリヤネのある風景」が現れつつある。

※1:「尾西地方の鋸屋根工場(群)について」(岩井章真、『産業遺産研究』第17号2010/5)



▲ノコギリヤネのまち100年マップ：100年前・50年前・現在の重ね合わせ

2. ノコが立つ

「私の生まれた頃は地主の時代であり、地主は特権階級であり、村落の支配者であった。つまり機屋と称する職業は下層から盛り上がり、地主の没落期に乗じて、さかんな生活力から活発な上昇線をたどり、もっとも浮沈の激しい時代を乗り越えて、今日近代産業の上昇線を邁進しつづけている姿でもある」（『花より花らしく』）

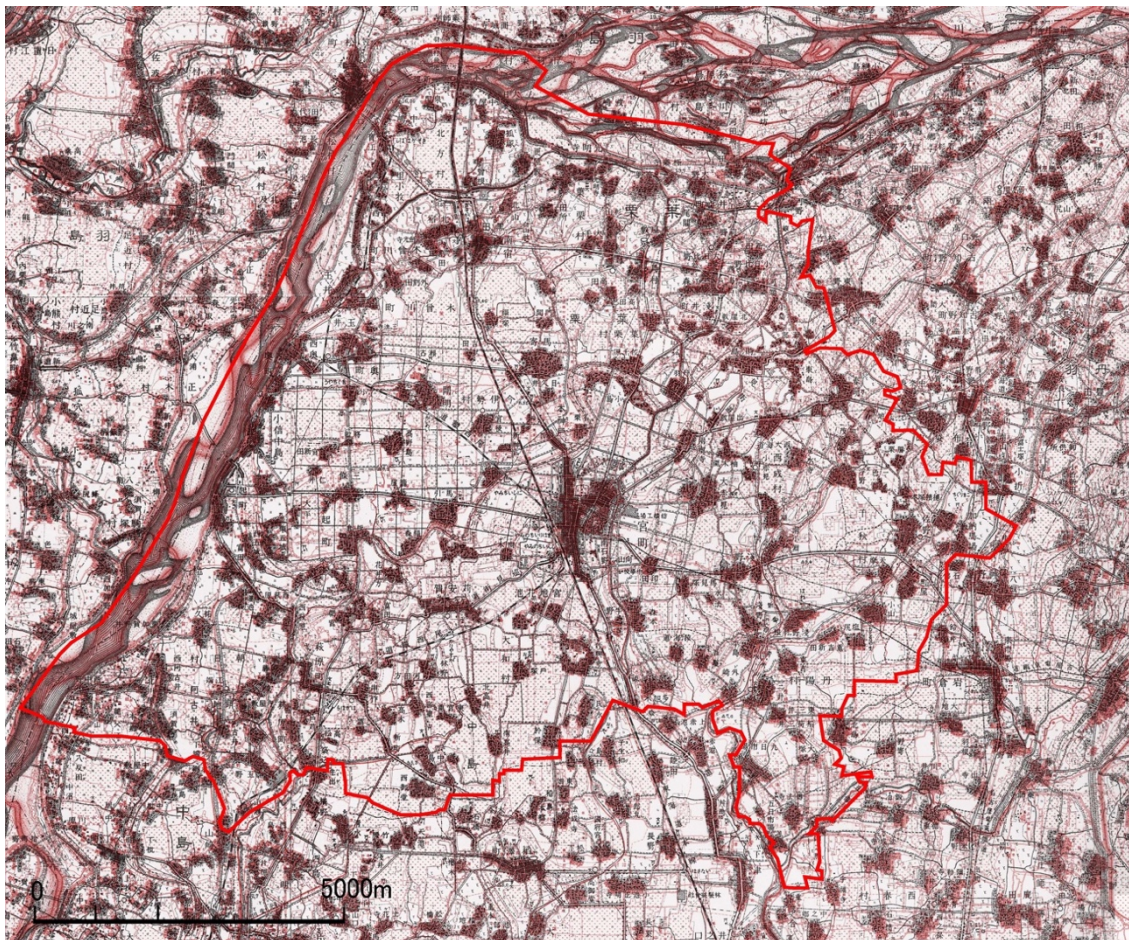
大正期、尾張の毛織物業の発展を担ったのは、下層地主、中堅自作農であった。この地域に蓄積されてきた技術と零細農の低賃金労働力を利用し、工場経営に取り組んだ。電力が普及し、動力織機を備えた鋸屋根の新工場が、起町を中心に建設されていったといわれる。

企業家的野心によって地主の支配からの自立を志向する家長（オノコ）の姿と先端的な鋸屋根工場が立ち上がる姿が重なる。「ノコが立つ風景」である。

富裕な地主であり、また、近代的な鋸屋根工場で織物業を営んでいた生家が、第一次大戦後の不況で破産し、家も土地も人手に渡ってしまったことを聞かされた時、節子は「なにものかになりたいと心に期した」という。15歳であった。

絵で身を立てる。

二十歳の《自画像》には、その揺るぎない決意が見て取れる。ひとりのメノコが立った。



▲「ノコが立つ」：1890年頃と1920年頃の集落・市街地の重ね合わせ

3. ノコが建つ

「いずれの村も田圃や畑の中に安直なのこぎり工場を建てて、騒音をまき散らし…」と、節子
が書き記した様を彷彿とさせるマップがある。

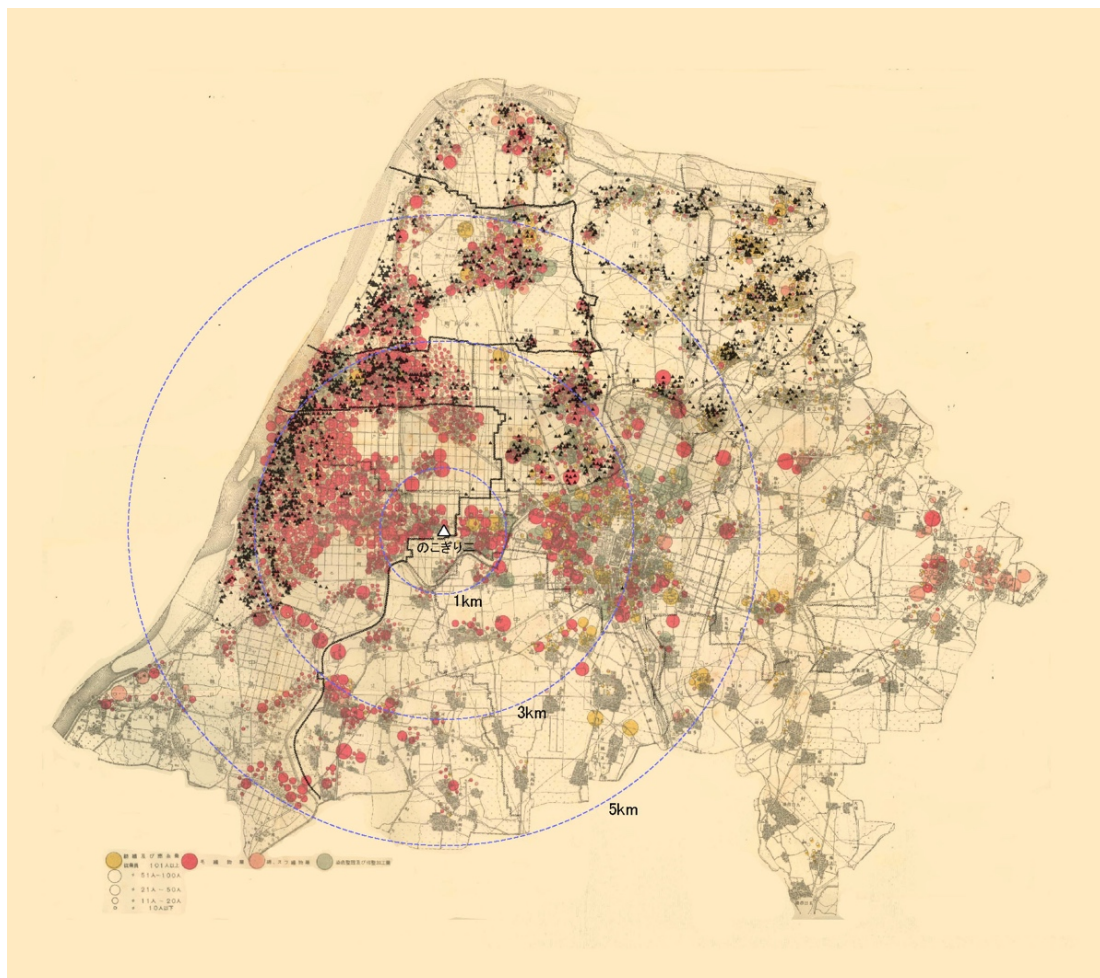
それは、昭和 30 年時点の繊維工場※¹を種別・規模別に分類して地図に落とした分布図である。
当時の繊維工場（紡績・撚糸業、毛織物業、綿・スフ織物業、染色整理・修整加工業）は約 6,000
で、その多くが、家族経営の小規模な鋸屋根工場であったと推測される。

その後、繊維工場は増殖し続け、オイルショック(1973 年)を契機に減少していく。やや古くな
るが、鋸屋根工場（操業終了を含む）の現況調査（2010 年時点）※²によれば、一宮市の中心部及
び南半分が未調査であるが、2,252 棟が確認されている（下図では、黒いドットで表示）。起、奥
町、玉ノ井など特に木曽川沿いに多くのノコギリヤネが集積している。

昭和 30 年代、起町はじめここかしこに、雨後のタケノコのごとく、農家の副業として、一・二
連の小さな鋸屋根工場が建ち上がっていったと思われる。それは、規格化されたコウバ（工場）で
あった。安普請、騒音、農地の無秩序な宅地化などの批判を伴う一方、毛織物業、まちの発展の象
徴でもあった。それが、「ノコが建つ風景」であった。

※2：『一宮市調査報告書』（中部都市学会・一宮市、1958）

※3：尾西地方の鋸屋根工場の一次調査その 1」（『産業遺産研究』第 18 号、2011）



▲「ノコが建つ」：繊維工場分布（1960 年頃）とノコギリヤネ分布（2010 年頃）の重ね合わせ

4. ノコが起つ

「何処までつづく木曽川の流れ、故郷で思い出すのは伊吹おろしの寒風とともに、朝から晩まで耳に聞こえる機を織る響き、尾張の血はいつまでもなつかしんでおります」（「尾西市政 40 年記念三岸節子展」図録）

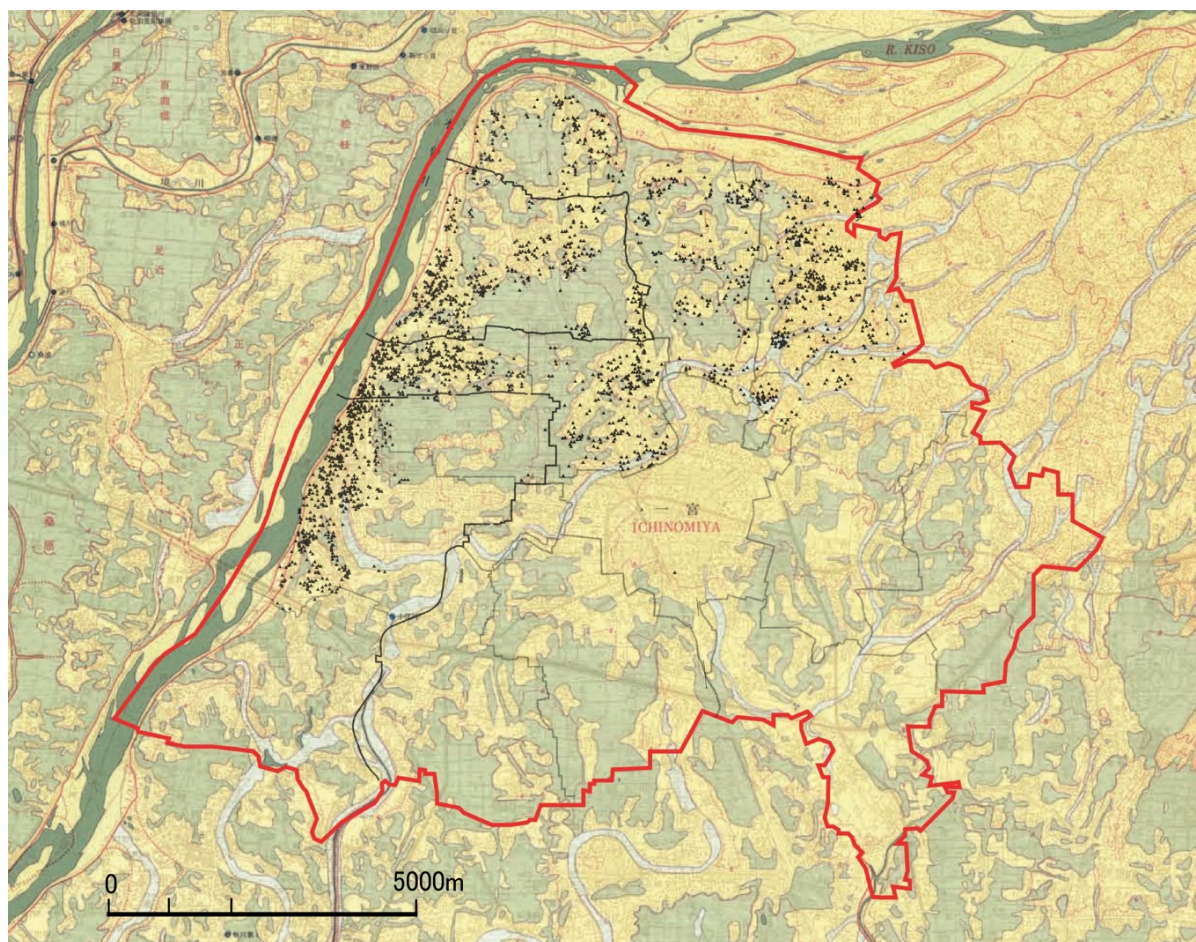
封建的な土地柄、生家の没落など、複雑な故郷への思いの一方で、節子の耳に、「ガッちゃん、ガッちゃん」と鳴り響いていた“騒音”は、晩年、“懐かしい響き”に変わったようだ。そして、工場の減少も手伝って、かつての「のどかな古里」を重ねて見ていたかもしれない。

ノコが立ち、ノコが建った。いま、ノコギリヤネに当時の勢いはない。しかし、のこぎり二のように、閉じた鋸屋根工場が開かれたノコギリヤネへと変貌する新しい動きが出てきた。

ノコが起つ。そんな呼び方が似合うのではないか。

「起」という字には、始まりの意味があり、「己が走る」と書く。その成り立ちは、ひざまずいた人が、へびの如く首をもたげて立つさまにあるという。

それを担うのは、農村の共同体を引きずる三岸節子の時代とは異なった、現代の自由な意思の持ち主たちだ。過去と共通するのは、木曽川が築いた尾張（尾州）の大地を舞台としていることである。彼ら・彼女（オノコ・メノコ）らは、古い共同体のしがらみとは無縁で、臆することなくノコギリヤネをガチャマンの呪縛から解放し、「ノコが起つ風景」を鮮烈に見せてくれるだろう。



▲「ノコが起つ」：河川地形図とノコギリヤネ分布の重ね合わせ（自然堤防上に分布するノコギリヤネ）

○エピローグ

ノコが立つ・ノコが建つ。それは、誤解を恐れずに言えば、太古の時代（おそらく、3,000 年ほど昔から）に、この地に入植し、木曾川と闘いながら、長い時間をかけて営まれてきた農業共同体から生まれたものである。

「尾張の血をなつかしんでおります」という一節の後には、「無念の中に亡くなったわが母よ、姉よ、妹よ、祖先の霊よ、安らかに眠りたまえ」と続く。そこには、あまり折り合いの良くなかった母が入っているが、数少ない理解者であった長兄はじめ男たちは出てこない。

また、三岸節子記念美術館のオープニング・セレモニーで読まれることのなかった節子の「開館の言葉」の中には、体調調整せず出席できない自分への苛立ち、また、魂を塗り込めた最後の作品《さいた さいた さくらがさいた》がこの場になく、しかも安住の地となるはずのこの美術館への収蔵さえ定かでない状況を恨むかのような一節がしたためられている。

「あるじのいない美術館であります。しかし形は出来ました魂のない空虚の美術館であります。美術館の建てられた土地も生涯忘れることの出来ない怨念の土地であります…」(『炎の画家 三岸節子』)

夫の三岸好太郎を生んだ北海道の札幌のような自由、開放性とは異なる、尾張の強固で、頑迷な農業共同体に起因する家族、世間、土地への怨恨、反抗、そして、そこからの離脱の強い意志が感じられる。はたして、三岸節子の魂は、この地に落ち着くことができたのであろうか。

「ノコが立つ・ノコが建つ風景」は、農業共同体の風景であった。「ノコが起つ風景」は、三岸節子が闘ってきた共同体の風景を超えていく。そこに、どのような「新たな共同体」あるいは「共同体的なもの」が見えてくるのだろうか。

長引くウィルス騒動で、次に一宮を訪れる時には、桜の季節は終わっているかもしれない。久しぶりに三岸美術館に《自画像》と《さくら》を訪ねてみようと思う。三岸節子の「はじまりと終わり」を確かめるために。

2020.3.14



▲ 《さいた さいた さくらがさいた》(93 歳)